

#### 4. モットーとしていること

### 自分の目でみえる範囲内で事業をやる

佐伯正浩氏が仕事をするうえで大切にしていることは、「自分の目でみえる範囲で事業をやる」である。「僕が会社をつくった目的は、自分の目にみえる範囲で、自分でやりたいという気持ちだけだったんですよ。自分が手とり足とりできない範囲ではやりたくないんですね。たとえば、新居浜に新しいお客さんができたら、新居浜まで行ってあげたい。従業員を信用していないというわけではなく、僕の信念です。以前、中国への進出の話があったんやけど、断ったんです。自分が中国に行ったら今治はみれんでしょう。」どのような仕事でも「信頼」は重要であるが、佐伯氏の仕事は「水」の側面から環境問題に深くコミットする仕事であり、水を自然に戻す際の最後の番人でもあるため、信頼がすべてである。それゆえに、佐伯氏は自分の目でみえる範囲で仕事をやりたいと考えている。

佐伯氏の仕事ぶりを聞き付けて銀行を介して M&A の話もあったが、佐伯氏は会社を大きくすることは考えていない。ただ、グリーンメンテナンスのようなタオルづくりを基盤から支える事業者はほかにいないため、一代で終わるのではなく、若い技術者を育てて事業を継承してもらいたいとおもっている。現在、グリーンメンテナンスでは3名の技術者がいる。浪速環境技術センターからの技術者が2名、中央繊維（株）からの技術者が1名である。かれらに「グリーンメンテナンスの使命を理解し、今治のタオルづくり、モノづくりのために事業をつづけてほしい」と切に願う佐伯氏である。

### 「すみません」と素直に言える人間でありたい

佐伯氏は、日頃から「すみません」と素直に言える人間でありたいとおもっている。「タオルびと」2024年5月号（佐伯正浩氏編

②号）でも触れたが、仕事をする際に大切にしている言葉が「平身低頭」である。「やっぱり気持ち良く仕事がしたいというのがあるので、言葉遣いとか取引先に対しては、年上だろうが年下だろうが関係なく平身低頭でいたいですね。何かあってもまずはこちらから謝って、最後は握手して別れるというのが一番ええとおもいます。『がんばります』『すみません』『こちらでやっときます』など、そんな言葉が素直に言えるような人でありたいとおもいますね。お客さんに気を遣わすというのは良くないことやとおもうんですね。」

こうした思いの背景には、佐伯氏が事業を継続できるのは地元のモノづくりあってのことだという感謝の気持ちがある。「今治から出て仕事をする気はありませんね。これからも今治のために仕事をしていきたいですね。今治でお世話になった以上は、今治だけにお返ししたいという気持ちが強いです。」

## グリーンメンテナンスという社名の意味



写真出典：（有）グリーンメンテナンス HP。

社名のグリーンメンテナンス green maintenance は、直訳すると「環境の保護・維持」である。グリーン green は、「緑色の」という意味のほかに「環境にやさしい」や「環境保護の」といった意味がある。メンテナンス maintenance は、「維

持・管理」や「保全」といった意味である。

29歳で起業した際、佐伯氏は、専門技術によって水質汚染を防ぎ、今治のタオル工業、そしてモノづくり産業の発展を支えること

を経営理念に掲げ、35年間事業をつづけてきた。これからの10年、20年も、自分の目でみえる範囲内で事業を継続していきたいと佐伯氏は考えている。

## 5. 好きな音楽

### ジプシークラシックはいいですね！

佐伯氏の趣味は、クラシック音楽を聴くことである。クラシック音楽のなかでもジプシークラシックが好きである。ジプシークラシックは「ロマ音楽」とも呼ばれ、「ロマ＝ジプシー」はインドに起源をもつアフリカや中東の各地を移動しながら生活をしてきた人びとの音楽を指している。




ジプシークラシックは、とくにハンガリーで進化を遂げ、ヴァイオリンやビオラ、コントラバスなどのクラシックで使われる弦楽器にギターやドラム、民族楽器などがくわわり、独自の音楽へと進化した。

ジプシークラシックの音楽には、「ハンガリー狂詩曲」（フランツ・リスト）や「ハンガリー舞曲」（ヨハネス・ブラームス）、「チャルダシュ」（ヴィットーリオ・モンティ）など世界でも有名な曲がある。

佐伯氏がもっとも好んで聴く曲は、パブロ・サラサーテ作曲の「ツィゴイネルワイゼン」である。そのほかに、ヴィットーリオ・モンティ作曲「チャルダッシュ」、ヨハネス・ブラームス作曲「ハンガリー舞曲第5番」がある。

サラサーテ（1844-1908年）は、スペインのバスク地域のパンブローナ出身のヴァイオリニストであり作曲家である。パリ音楽院で学び、卒業後はヨーロッパ各地で演奏旅行をおこない名声を博した。1878年の「ツィゴイネルワイゼン」をはじめ、「バスク奇想曲」や「スペイン舞曲」、「カルメン幻想曲」、「序奏とタランテラ」など

を作曲し、名作を世に送り出した。「ツィゴイネルワイゼン」はドイツ語の Zigeunerweisen であり、「ジプシーの歌」という意味である。流浪の民であるロマ（ジプシー）の音楽は、軽快でありながらどこことなく哀愁がある。今治の地にしっかりと足を付けた佐伯氏であるが、ジプシークラシックを聴きながら壮大なビジョンをイメージする。

その他、佐伯氏はイージーリスニング  の音楽も好きである。たとえば、ポール・モーリア  の「蒼いノクターン」や「涙のトッカータ」、レイモン・ルフェーヴル  の「シバの女王」や「哀しみの終わりに」、イーグルスの「ホテル・カリフォルニア」なども好んで聴いている。音楽鑑賞は、忙しい仕事の合間にホッと一息つける時間であり、佐伯氏のエネルギーの源でもある。

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

## 参考文献

一般社団法人産業環境管理協会 HP

（<https://www.jemai.or.jp/>）。

今治市立南中学校 HP「学校沿革史」

（<https://imabari-minami-j.esnet.ed.jp/history>）。

今治タオル工業組合 HP

（<https://itia.or.jp>）。

岡市友利「瀬戸内海の環境保全の変遷」（公社）瀬戸内海環境保全協会『瀬戸内海』No.67、2014年、4-11頁。

（株）東研サーモテック HP「歴史・沿革」

（<https://tohkenthermo.co.jp/corporate/history/>）。

（株）堀場製作所 HP「水質総量規制とは？」

（<https://www.horiba.com/jpn/water-liquid/>）。

山本民次「瀬戸内海の貧栄養化について（再考）」（公社）日本マリ

ソエンジニアリング学会『マリンエンジニアリング』第49巻4号、  
2014年、496-501頁。

### 編集後記

こんなことを言ったら、佐伯さんは照れ笑いするかもしれませんが、佐伯さんは思いやりのある、優しい穏やかな方です。そして、お酒好きで、よく笑い、郷土愛に溢れています。

インタビュー時のお話でそれを感じましたが、インタビューの日の夜に同級生を集めて、『タオルの帽子』クラウドファンディング目標金額達成おめでとう会を開いていただいた際にも、言葉の選び方や話の間、所作などから感じとることができました。



佐伯さんにお会いしてインタビューをお願いする少しまえに、佐伯さんから「タオルびと」制作プロジェクトに対してたくさんのサポートを受けていました。ちょうど「タオルびと」配信10周年記念『タオルの帽子』の書籍化にあたりクラウドファンディングで資金を集めているときであり、同プロジェクトのメンバーを介してクラウドファンディングのことを耳にした佐伯さんは、「郷土のために」といち早く応援してくれました。しかも、ノーリターンで。また、先の「おめでとう会」に参加された同級生の方々からも温かいサポートをいただきました。

実のところ、クラウドファンディングでの資金集めは、苦戦を強いられました。ご支援をいただいたすべての方々には感謝の言葉しかありませんが、「こりゃ、参った」と精神的に落ち込んでいたタイミングで佐伯さんからのサポートが（擬音であらわすと）「ぼんっ」とあり、どれだけ助けられたか。このときから「どんな方だろう」と興味をもっていました。お会いして合点がいきました。改めて「タオルびと」は佐伯さんをはじめ、多くの方々を支えられているのだとおもいました。

「おめでとう会」終了後に今治でみた三日月がきれいでした。「成長する」という意味をもつ三日月ですが、グリーンメンテナンスの将来、そして今治タオル工業の将来が、三日月に導かれるように、これからも成長しますように！

### 次回の「タオルびと」

「タオルびと」の38人目は、伸べ士の田窪セツ子氏である。タオルづくりの裾野の広さは「タオルびと」でとり上げてきた人びとの顔ぶれをみるとわかるが、伸べ士は初登場である。今回は、半世紀以上もの間、伸べ士としてキャリアを積んできた田窪氏のタオル人生に焦点を当てる。

